

1. 社会的包摂に向けた生涯学習・社会教育の在り方・姿はどうあるべきか。

どうしても「支援」という表現には違和感を抱きます。状況として少数派、弱い立場にあるかもしれませんが、それぞれの個性を認め、寛容の精神をもってお互いを認め合うことが基本ではないでしょうか。支援するのではなく、共に学び合うこと、共に育つことこそが社会教育ではないかと思います。

「場」を創出して、これまで知らなかった者同士が出合い、
「対話」を促し、お互いの本音を語り、情報を共有することで理解が生まれ、
「活動」に取り組むことで、お互いの長所、短所を知り、新たな信頼関係を築く
まさに、公民館の理念である「集う」「学ぶ」「結ぶ」に相通じます。

現状では、同じ町に暮らしていても、どんな生活をしているのかも、何を感じているのかも、何を求めているのかも事実としては知らない人が多いのではないのでしょうか。社会教育を通じて、思い込みのもとに判断している状況を越えなければいけないと思います。

2. 実現のためにどのような課題があり、どのような方策が考えられるか。

(1) 外国人への取り組み

現在新居浜市に在住する外国人は約1%です。それでも、街中で出会う機会は多くなったと感じます。しかし、外国人は外国人で集団になり、挨拶を交わすのがやっとです。彼らにとっても異国の地で生活することは不安も多く、誰かとつながることでより良い状況をつくっていきたいと望んでいることを留学生や福祉事業所で働く外国人から聞かされました。しかし、これまでそこから発展せず、毎年一度の交流行事の繰り返しで、日常化には至っていません。

課題としては

- ① 事業所で働く外国人は就労が最優先され、地域との接点を持たない。
 - ➔ 事業所に対して外国人との交流の機会の拡充について情報交換を行う。
 - ➔ 公民館等が主体となって、地域住民と在住外国人が交流できる講座や行事を実施する。特に食文化体験、母国の文化や観光などについて情報提供してもらい交流する。地域の祭りなどに参加を促す。
 - ➔ 学校教育での異文化教育や放課後の居場所において活躍できる場をつくる。
- ② ことばが通じないことが邪魔をして、交流がスムーズにいかない。
 - ➔ 日本語教育指導者の育成、日本語講座の拡充を図り、外国人が日本語を学べる機会を増やす。(生涯学習大学が発足した30年前に要望があり、却下した経験)

③ 外国人を地域ぐるみで支えていく仕組みづくりができていない。

➔ 今年になってようやく本市にも国際交流協会が発足した。これまではここに支援活動を行っていたグループがお互いの強みを発揮して総合的に外国人の支援を行っていく基盤ができた。しかしながら、現状は日本人の運営委員しかおらず、外国人の思いを反映させるには至っていない。今後は当事者である外国人が語る場として発展すべきと考えます。

➔ 国際交流協会と生涯学習センターや公民館などが協働で新しい学びを創出していくべき、つながる社会教育の具体的な実践を促す何らかの支援策も必要と考えます。

(2) 困難を抱える家庭や子ども達への支援

どこまでプライベートな領域に入っていくことが可能なのか常に考えてしまいます。学校は壁を超えることを嫌います。地域にとっても同じような所が多いのですが、小さな時から、子ども教室や多様な体験活動を展開し、関係性が強い地域においては信頼関係ができていて、プライバシーの壁を越えても大丈夫という事例を見てきました。最近「子ども食堂」も増えてきましたが、共に食事を摂ることで関係性が深まり、親も一緒に活動に参加してくれる事例も生まれています。保護者が自分から、不安や悩みを語りだすこともあり、寛容の精神をもって関わる地域の人たちもいます。深刻な支援が必要な必要な人もいますが、そこに至らないよう芽を摘む取り組みから社会教育は関わっていくべきではないでしょうか。それだけのソーシャルキャピタルの貯えがまだあると信じています。